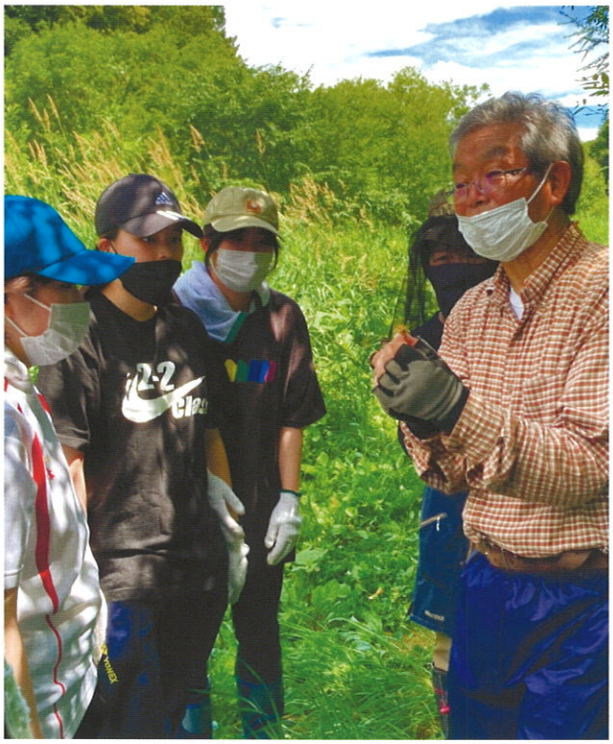
地方と都市を結ぶホットライン・マガジン

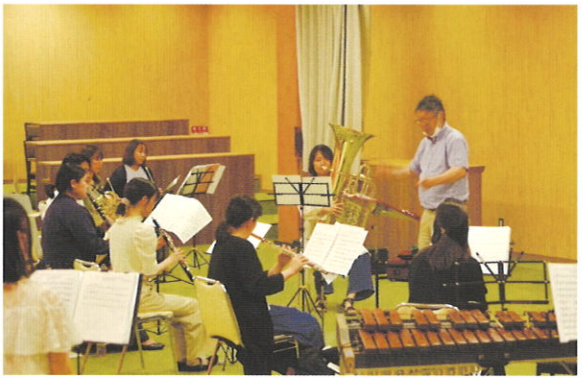
でぽら DePOLA

S6
2022年



特集 未来へ向けて共にウォーキング!

持続可能な地域を目指して



地域の産業・文化の発展に
特定地域づくり事業協同組合

地域にUターンして働きたい人と、人材を求める企業を結ぶ「特定地域づくり事業協同組合」制度が始まって2年。各地で様々な形の事業協同組合が創設され、公的な財政的支援を受けて、活動が本格化している。今回は、20数社の企業が加入して令和3年4月からスタート、社員8名を抱える長崎県五島市と、山陰に音楽文化を広めたいと「協同組合Biz.Coop.はまだ」を組織化、6月にはコンサートも開催された浜田市の事例を紹介する。

▲五島牛の飼育係をする尾田さん

五島ブランド育成の一翼に
五島市地域づくり事業協同組合

●長崎県五島（ごとうし）市

▲福江港に着いた豪華大型フェリー

▼「協同組合Biz.Coop.はまだ」のメンバーによる演奏会(浜田市)

朝8時10分、昨夜11時に福岡港を出た豪華フェリーが福江港へ着くと、大勢の人が下船して各地へ散っていった。さすが3万5000人都市五島市の活気ある風景である。

港からほど近い場所に五島市地域づくり事業協同組合（以下「組合」）の事務所があった。目の前には江戸時代に築城された福江城跡があり、その先には武家屋敷通りがある景勝地。事務所では事務局長の野口敏明さん(62)が待っていてくれ、尾田遼斗さん(28)が現在働いているJAごとう畜産部へ案内してくれることになった。

尾田さんは組合が開設した令和3年4月に第1号で入社した社員。「尾田君はどんな仕事も嫌がらず誠実に積極的に働いてくれる模範生で、今月から黒毛和牛の飼育係をしています。現在8人の社員がおり、うち女性は2名です。企業からはもっと社員の派遣要請がありますので、社員募集を続けています」と野口さんは語る。そういう野口さんと事務局で働く牟田美和子さんも長崎ウインドサービスグループ「E WIND」からの出向社員だという。社員たちは直接仕事場へ行き、終了後は直帰するため、皆が顔を揃える機会は殆どなさそうだ。

五島に移住して、祖母の介護も

車で30分ほど内陸部へ行ったところにJAごとう畜産部の建物が見えてきた。木造の広々とした牛舎が5棟あり300頭ほどの牛たちが、一斉に我々に優しい目を向けてくる。朝の餌やりと掃除を済ませた尾田さんが事務所から出てきた。「仕事は主に朝夕の餌やりで、暇なときは糞尿の処理なども手伝っています。組合に入社して1年間で5カ所の企業で働きましたが、牛の世話は初めて。でも東京の動物専門学校の野生動物保護科で学んだため、

◀尾田さんが働くJAごとうの牛舎

生き物と触れる仕事は楽しいです。朝夕は餌やりで大忙しですが日中は暇な時間があり、ベテラン飼育係から話を聞いたり、子牛たちと遊んだりできます」と尾田さんは言う。

埼玉県出身。両親のふるさとが五島市で、幼いころ両親と訪れた思い出のまちでもある。祖母が独り暮らしをしているため、その面倒を見たいと五島市へ移住してきた。「祖母は100歳になり、今は介護施設へ入所していますが、実家を保全しながら私が介護をしたいと思っています」

五島は黒毛和牛の伝統的飼育地で、農家が育てた子牛は神戸牛、松坂牛として高額で取り引きされているようだ。同所で時間をかけて育てた牛は月1、2頭が出荷され、五島黒毛和牛として市内のみで販売されている。JAごとうとの契約で仕事は6月から3カ月間、牛たちの幸せな時間を精一杯手伝いたいと、尾田さんは牛舎への見回りに戻っていった。

▲島中部にある美しい田園。昨日ここで田植えをしたと語る野口さん

五島芋を再生して新ブランド化

五島市にある福江島は東西45㎞、南北30㎞、五島列島最大の島。古くから遣唐使船の寄港地として栄え、五島藩のお膝元として政治・経済・文化・観光の中心であった。周辺は大小の島が点在する一大漁業地、日本ジオパーク認定の海岸、空海の痕跡をたどる八十八ヵ所霊場等観光名所も多いが、一歩内陸部へ入ると深い森や畑、水田が広がる田園地帯で、島というイメージは全くない。

次の取材地㈱アグリ・コーポレーションは島の北西部・三井楽（みいらく）地区にあり、車で40分ほど。県道30号を北上していくと深い森の先に美しい集落が現れた。田植を終えたばかりの田が青空を映して輝いている。野口さんは車を止めて「実は私の家の田んぼもあり、昨日も田植えをしたんです」と苦笑した。

水田作業の前には、田畑の周辺や休耕地に200本の椿を植樹したという。市内には至るところに椿が植樹され「五島椿」は五島の特産品になっているが、市ではさらに生産拡大に力を入れている。

「よく働くのですね」と感心すると、「朝は6時起きして田畑へ、急いで朝食、8時には出社するのが当たり前です」と野口さん。60歳でJAごとうを定年退職し、風力発電施設のメンテナンスと運用をサポートする「E WIND」に入社し「五島市民電力」の運営に関わり、さらに2年前から組合の設立にも携わってきた。

▲㈱アグリ・コーポレーションの佐藤社長

▼組合から派遣されている杉山さん

組合では加入した企業の要請に基づいて2～6カ月契約で社員を派遣する。派遣社員は原則として朝8時に出社して夕方5時に勤務終了、土日は休日のため、家庭菜園や釣り、マリンスポーツなどの趣味も十分楽しめると好評だ。

三井楽の丘陵地に㈱アグリ・コーポレーションの建物と広大な畑が現れた。45haの農地では3種（安納芋、紫芋、芋おとめ）のさつま芋を有機栽培しており、組合からは杉山卓弥さん(31)ら2名が派遣されている。畑に芋苗を植え付ける仕事だが、生育した芋葉に巣食う虫や雑草の除去作業も行う。3棟のハウスではベトナムの農業研修生たちが水撒き作

▲おしゃぶーがネーミングの商品を持って、末留さん

▲芋畑の先に加工所・オフィス

業を行なっていた。

㈱アグリ・コーポレーションは、平成23年5月に4000坪の一枚畑が売りに出ていると知って初めて福江島を訪ねた佐藤義貴青年が「ここで農業をしよう」と決意した場所。舞鶴市の出身、大学を出て税理士事務所で働いていたが、父親がスーパーマーケットを経営していたので会社経営への関心があった。島では古くからさつま芋を栽培、ミネラルの多い豊かな土壌で、糖度が高くほくほくした芋が収穫できることを学んだ佐藤さんは、これらを有機栽培しようと決断、8月には㈱アグリ・コーポレーションを設立した。耕作放棄地を地域資源と捉え再生することで、移住者や市民に働く場を提供する「オーガニックをプラットホームにした街づくり」構想が会社設立のビジョンで、今では赤ちゃんでも安心して食べられるような有機芋を各種生産、加工では地元の女性たちの雇用の場になっている。

「五島商店　佐藤の芋屋」という愛称が商品に付けられたネーミング。ベビー用のおしゃぶりから離乳食、芋の価値魅力を最大限生かした焼き芋や干し芋、ケーキ、ポタージュ、芋バター等々、どれも手間をかけた深い味わいと芋とは思えない高級和菓子の味である。

派遣社員の杉山さんは地元出身、JAごとうで働いていた。「五島の芋がこれほど優れているのをここで学びました。働きやすい環境で地域の活性化にも役立っている会社なので、これからも働きたいです」と言う。

「組合から来ていただく人はとても戦力になります」と語るのは栽培責任者を務める末留真治さん。福岡市でホテルの料理人として従事し、その後、島内のショッピングモールで16年勤務していたが、同社のことを知り6年前に転職してきた。「栽培では芋の特性に合わせて植え付けと収穫をします。有機栽培は手間がかかりますが、決して手抜きをしない。それに応えていい芋が収穫できます」と末留さん。畑の周辺は山林のため、葉は鹿が好み、実はイノシシに食べられることが多かった。昨年市が有刺鉄線を張ってくれたため、獣害から解放された。

佐藤社長は関西で、農家が生産する野菜を直売する「旬の駅」を5店舗経営。東京への出張も多い多忙な日々だが、月1度は五島へ戻り、農園で草取りを楽しむ。「2050年までには残っている600haの耕作放棄地を再生、環境にやさしい地域にするオーガニック・プラットホームを完成したいと思います。社員は約50名おり、組合の社員派遣を一番利用させて頂いています。すぐに役立つ人たちでとても助かっており、常に10名ほど派遣してほしいところです。優れた人材をさらに増やして欲しいと願っています」と語っていた。

首都圏でも人気、五島の鯛出汁カレー

翌日は、吉久木町で昨年10月に竣工した「ごと株式会社」のレトルト研究所を訪問した。「ごと」は五島の旬の海産物や農産物を生かした加工食品の開発・販売を行っており、特に鯛出汁レトルトカレーが人気。調理から加工までの加圧加熱殺菌等をすべてコンピュータ化し、1時間で約1800袋の充填が可能である。食品安全管理面でも世界基準以上のシステムを確立した。

製造本部長の隈本耕一郎さんが出迎えてくれた。青少年の見学も多いため、壁や廊下にはカラフルな案内図を設置、廊下から窓越しに製造過程が見学できる。カレーは5種ある

▲ごと㈱レトルト研究所の玄関先で。隈本製造本部長

▲ガラス戸越しにレトルトカレーの製造が見学できる

▼レトルト研究所の建物

◀鯛出汁レトルトカレーをはじめとするごと㈱の商品

がその日は最もポピュラーなプレーンカレーの製造。厳選された材料とスパイスを攪拌して調理し、自動的に包装されていく。次の部屋には同社にしかないという超大型調合窯があり、出来上がったパックは入念に加熱殺菌される。その後14日間保管されて、問題がないことを確認して出荷する。17万袋を保管する自動倉庫も併設している。

社員は熟練した年配者に加えて障がい者も数名雇用、さらに7月から組合の社員1名が派遣されることになっている。機械化されているため女性向きな職場と見えるが、隈本さんは「組合さんには20代あたりの男性の派遣を要望しているところです。職場に新風と刺激が欲しいのです」と野口さんに注文する。野口さんは7月に入社の新人を派遣する心積りのようだ。

隈本部長は「派遣社員の方はいずれ当社の中堅社員として働いてもらいたい。ただ給与面で言うと、組合での給与が一般より高額なので、その辺が心配です」とも言っていた。

なお、ごと㈱は神戸市出身の木下秀鷹社長が五島の食材を加工、販売した6次産業化に取り組んでおり、「地方には素晴らしい食文化がある。それを発信して元気にしたい」と述べている。市内の繁華街の一角に「おみやげ&カフェごと」というお洒落な直売店があり、カレーの他にごと芋、かんころ餅等のさつま芋製品を多数販売、東京では「成城石井」で一部を販売している。カレーを何種か購入してみたが、鯛の出汁をベースにしたカレーは芳醇な和風味で旨い。五島和牛や鶏肉、海産物入り高級カレーもあった。

五島の未来を担っていく気持ちで

組合に戻って、清瀧誠司理事長にお話を伺った。清瀧理事長は福江商工会議所の会頭で、五島市民電力㈱の代表取締役会長であり、個人的には出光興産のガソリンスタンド等を経営している。出光がオープンした第1号のガソリンスタンドが五島市にあり、清瀧氏の父上が船舶用に設けたものだと言う。

清瀧会長の呼びかけもあって、組合には20数社の企業が組合員又は賛助会員に加入、設立が迅速に進んだ。

「組合員(企業)は入会金10万円と年2万円の会費を支払います。社員を派遣した場合は時給1000円も支払ってもらっています。それだけにこちらが派遣する社員には、企業に貢献できる人が求められる。現在は企業から大変評価されており、あと10名ほど必要でしょう」と理事長は言う。

社員募集は市が協力してネット等で広報している他、組合のホームページにも掲載しており、最近は都市住民の問い合わせも多くなった。しかし面談して、必ずしも採用するわけではない。「今の若者は、気楽に働きたい、フリーターでも構わないという傾向があります。そんな若者には当組合の様々な仕事を体験するシステムは適していますが、仕事には責任感が大切で、野口君らに指導をお願いしています」

市内には高校が4校あり、卒業者の7割が島に残ったりUターンしたいと答えているが、若者が希望する仕事はまだ少ない。それについて理事長は「五島は農林水産業がメインですが、最近は加工業が盛んで、五島ブランドとして全国規模で展開する企業が増えています。また、再生エネルギーのまちとして電力自給率は50%を超え2年後には80%が五島市民電力で賄えます。そんな持続可能な未来志向のまちであることを若者が理解し、その一員として働きたいという意志を持ってほしい。必ずマッチした仕事があります。仕事の場や研修の機会を用意して安定した生活の場を供するのが五島市地域づくり事業協同組合です。給与も一般より高く、保険や年金加入も整っています」と強調した。

文／浅井登美子　写真／小林恵

▲福江城跡公園にて、清瀧理事長

▶「ごとうの電気」「E WIND」に関するパンフレット

家庭も、企業も、電気を選ぶ時代へ
ごとうの電気®
powered by 五島市民電力

●五島市地域づくり事業協同組合
☎・fax 0959-72-2120